

シャルトル大聖堂の《善きサマリア人の譬え話》のステンドグラスに関する一考察
—教会論的・終末論的図像解釈の可能性をめぐって—

小野 康子 (名古屋大学)

13世紀初頭に制作された「善きサマリア人の譬え話」を主題とするステンドグラスのなかで、サンス大聖堂やブルージュ大聖堂の作例では、譬え話を救済史における三つの段階（「律法以前」「律法下」「恩寵下」）に対応させる神学的解釈に基づき、「原罪」、「モーセ伝」、「キリスト受難伝」のそれぞれを、対応する譬え話各場面の周囲に配する。他方、同時期のシャルトル大聖堂の作例では、窓の下半分に譬え話を、上半分にアダムとエヴァの物語を、各々多数の場面によって表す構成を取り、譬え話の旅人の災難と原罪を対比しつつ、ともに神により救済されることを説くと考えられてきた。しかし、物語同士の関係性はさほど緊密ではなく、それゆえ、E. マールをはじめ先行研究ではその構成においてしばしば低く評価され、また教訓性も弱いと考えられてきた。

これに対し発表者は、本作例が救済論だけでなく、教会論や終末論に基づいた表現を含み、従来の見解とは異なり、教父による様々な解釈を重層的に表した極めて神学的メッセージ性の高い作品であることを明らかとしたい。また、このような表現と窓全体の場面構成の関係も重要であり、本作を制作するにあたり、図像考案者がいかに効果的に物語叙述を行ったかという観点からも考察を行う。そこで本発表では、以下の二点の考察を中心に、本作の教会論的・終末論的図像解釈の可能性を提示し、同時に、このような高度な神学的メッセージが図案考案者による場面構成でその効果を高めていたことを示したい。

1) 他の作例では一つの場面として描かれることが多い「サマリア人による救済」が、本作では四つの場面で詳細に描かれる。これらの場面は、「洗礼を受けず、キリストの身体と一体化していない者は誰も教会に入ることは許されていない」という、ペーダによる善きサマリア人の譬え話の註解をはじめ、オリーブ油と葡萄酒を用いた介抱を「洗礼の秘跡」と、また旅人を運ぶ家畜を「キリストの身体」と結びつける様々な教父の註解など、教会論と関連させることができる。また、サマリア人が宿屋で旅人を介抱する場面では、背後に描かれた開口部とその前に垂れ下がるランプが教会の内陣を暗示し、教会というテーマの存在を強く印象づける。このように、シャルトルでは譬え話の教会論的解釈に重点を置く場面構成がなされていると考えられる。

2) 善きサマリア人の譬え話におけるサマリア人の再来への約束は、教父たちにより、キリストの再臨と結びつけられている。このことに加えて、窓上部に描かれる「労働するアダムとエヴァ」、「扉の前に立つ神」、「カインによるアベルの殺害」という三つの場面は、終末論的な関係性のもとで理解することができる。このような問題を、ロマネスクから初期ゴシック期の教会扉口における「最後の審判」の主題と関連する図像表現、とくに「賢き乙女と愚かな乙女の譬え話」と比較しながら考察する。